

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：11101
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26370557
 研究課題名(和文) 右方移動現象の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの解明

 研究課題名(英文) Elucidation of the Mechanism of Merge and Linearization in the Sensorimotor System Based on the Analysis of Rightward Movement Phenomena

 研究代表者
 木村 宣美 (KIMURA, NORIMI)

 弘前大学・人文社会科学部・教授

 研究者番号：90195371
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：RNR構文ではRNR要素以外の要素に顕在的左方移動が適用されて導かれるわけではない。等位項における対称性が破綻している、RNR要素は本来の位置にあることから、併合による統語物の線形化を適切に捉えることのできるin-situ削除分析が優れている。2種類のBeを仮定することで、法助動詞の根源的意味が好まれることに説明を与えることができる。Beは上昇動詞である、beは小節を補部にとり、動詞のbeと助動詞のbeがあると仮定することで、倒置文の線形化を適切に捉えることができる。動詞句削除におけるbeの振り舞いは、beingが動詞で、beとbeenが助動詞であるとする語彙的特性に基づき捉えることができる。

研究成果の概要(英文)：RNR constructions are not derived by an overt leftward movement which is applied to elements other than the RNRed elements. The in-situ deletion analysis of RNR is superior to the multidominance analysis which can capture the linearization of the syntactic objects formed by the operation Merge because symmetry is broken in the co-ordinates and an RNRed element stays in its original position. The root meaning is preferred when only modal auxiliaries occur which is accounted for by assuming that we have a verb be and an auxiliary be. The linearization of inverted constructions can be properly captured by assuming three hypotheses that (a) be is a raising verb, (b) the complement of be is a small clause, (c) there are two bes. Being is obligatorily elided, and be and been are optionally elided in verb phrase deletion, which can be explained by the analysis with the lexical properties where being is a verb, but be and been are auxiliary verbs.

研究分野：英語学

キーワード：右方移動現象 併合 線形化 等位構造 Beの語彙的特性 動詞句削除 法助動詞の意味

1. 研究開始当初の背景

ミニマリスト・プログラム (Minimalist Program: MP) での統語操作「併合 (Merge)」と感覚運動体系と概念意図体系のメカニズムの解明は、第 87 回アメリカ言語学会 (2013) や慶応言語学コロキウム (2013) 等で取り上げられていることからわかるように、普遍文法 (UG) の解明及び構築の際に、言語学的に解明されなければならない重要な問題であり、その精緻化に向けた研究が展開されていた。

Kayne (1994) は、線形順序と支配関係に関する Linear Correspondence Axiom (LCA) を、Pesetsky and Fox (2005) は、phase ごとの線形化で語順が確定するという循環的線形化を、Chomsky (2008, 2013) は、基本的な統語操作「併合」に基づく分析を提案しているが、線形化の具体的なメカニズムが明らかではないことは、木村宣美 (2010) 「2 種類の右枝節点繰上げ構文」弘前大学人文学部『人文社会論叢 (人文科学篇)』第 25 号で指摘した。さらに、Chomsky (2008) が提案する内部併合と外部併合に加えて、Citko (2011) では、平行併合が提案されているが、一致現象に十分な説明を与えることができないことを、木村宣美 (2011) 「全域的右枝節点繰上げ構文と削除分析」日本中部言語学会 *Ars Linguistica* 18 で論じ、この不備を克服するために、3 種類の右枝接点繰上げ (right node raising: RNR) 構文を峻別する必要があることを、日本言語学会第 145 回大会 (2012) (九州大学) で指摘した。

MP では、統語操作は併合のみで、それ以外は感覚運動体系と概念意図体系で処理されるとの理論の「簡易化」に向けた提案がなされ、この妥当性の検証が、国内及び海外において活発になされているが、普遍文法の解明及び構築に寄与するためには、特に、併合と感覚運動体系・概念意図体系の詳細及び分業 (division of labor) に関して、理論全体の構成をも視野に入れ、新たな視点から、詳細な検討を加えることが必要であった。

2. 研究の目的

【概要】

MP (Chomsky 2008, 2013) では、人間言語の生得的で普遍的な特性に関する理論、すなわち、脳内にあると仮定されている普遍文法に関する仮説「基本的な統語操作は、語 (句) 等を組み合わせる統語単位を作る併合のみで、感覚運動体系において線形化がなされる。」が提案されている。本研究では、普遍文法の解明及び構築に寄与するために、右方移動 (rightward movement) 現象の分析に基づき、併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに対する従来の分析の妥当性を検証し、より説明的妥当性のある分析を提案することにある。

【これまでの研究成果】

(1) 右枝節点繰上げ：木村 (2010, 2011,

2012) では、RNR 要素をすべての等位項に設定できる「全域的 RNR 構文」(I'm interested in but rather apprehensive about their new proposal.) と、すべての等位項に生じる構造を設定することができず、RNR 要素 (対称的述語) が RNR 構造から RNR 要素を除いた全体と関連付けられる「対称的 RNR 構文」(John whistled and Mary hummed at equal volumes.) という、異なる統語特性を持つ RNR 構文があることを明らかにした。「全域的 RNR 構文」に対しては、削除に基づく RNR 構文の in-situ 削除分析を、他方、対称的述語が含まれる「対称的 RNR 構文」に対しては、多重支配に基づく RNR 構文の Ex-situ 多重支配分析を提案した。Ex-situ 多重支配分析が適用される現象は、対称的述語に係わる RNR 要素をすべての等位項に設定することができない場合のみであり、Citko (2005, 2011) の平行併合に基づく多重支配分析と「全域的 RNR 構文」の in-situ 削除分析を比較し、すべての等位項ではなく、一番右側の等位項とのみ一致を示す現象に基づき、parallel Merge に基づく多重支配分析より、「全域的 RNR 構文」の構造と削除分析に基づく分析の方が優れていることを明らかにし、Citko (2005, 2011) が提案する併合の精緻化が必要であることを、RNR 構文の分析に基づき、指摘した。

(2) 右方転移：日本語の右方転移 (right dislocation) は、様々な島の条件に従うが、主語や属格名詞句の転移が許されることから、かき混ぜのような左方移動に基づく現象ではない。木村 (2012) では、右方転移要素が旧情報である場合と新情報である場合があるとする Nakagawa, Asao and Nagaya (2008) の観察に着目し、従来の分析 (移動分析 (黒木 2006)・削除分析 (久野 1978, Abe 2004)) に対して、右方転移の構造には単節構造と複合節構造があるが、いずれも移動のメカニズムに係わる現象であることを、日本中部言語学会第 58 回定例研究会 (2012) (静岡県立大学) で指摘した。また、Takano (2010) では、右方転移が移動に課される条件には従わないという新たな見解に基づき、統語特性を感覚運動体系 (音声形式部門) で扱う分析が提案されている。このように、併合と線形化の対応関係が、どのように扱われるべきなのか、右方移動現象である右方転移の統語特性を更に詳細に吟味し、再検討する必要があることを指摘した。

【研究成果の発展】

『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(平成 22 年度 - 平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 22520487) では、右方移動現象の分析に基づいて、1) Citko (2005, 2011) が提案する平行併合の精緻化が必要であること、2) 統語特性及び線形化を統語部門

あるいは感覚運動体系のいずれの部門で処理するのが最適であるのかを検討する必要があることを指摘した。本研究で分析対象となる右方移動現象は、左方移動現象とは異なる特性を示し、従来の研究において、例外的あるいは周延的な取り扱いを受けることが多く、MPの枠組みで、右方移動現象の精緻化に向けて、改めて詳細な調査及び分析をする必要がある。このような観点で、併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに考察を加えることが重要であるとの着想に至った。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、基本的な資料の収集及び包括的・網羅的な調査・分析・検証に基づき、【平成26年度】併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに関する調査と分析、【平成27年度】等位構造が関与する右方移動現象の調査と分析；等位構造以外が関与する右方移動現象の調査と分析、【平成28年度】右方移動現象の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの検証と精緻化】の手順を踏み、研究を実施する。研究代表者のみで実施される研究において、研究が当初の計画どおりに進むように、研究を実施する様々な段階で、批判的な検証作業を行いながら、着実に研究を遂行する。

・研究計画

(1)平成26年度

①Kayne(1994), Nunes(2004), Pesetsky and Fox(2005), de Vos and Vicente(2005), Kasai(2008)等が提案する線形化に関する分析を幅広く調査する。

② Chomsky(2008), Citko(2005, 2011), Chaves(2011), Larson(2012)等が提案する併合に関する分析を幅広く調査する。

③併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに関する従来の分析を総合的・包括的に調査し、分析する。

(2)平成27年度

①Kayne(1994), Nunes(2004), Pesetsky and Fox(2005), de Vos and Vicente(2005), Kasai(2008)等が提案する線形化に関する分析を幅広く調査する。

② Chomsky(2008), Citko(2005, 2011), Chaves(2011), Larson(2012)等が提案する併合に関する分析を幅広く調査する。

③併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに関する従来の分析を総合的・包括的に調査し、分析する。

(3)平成28年度

①等位構造が関与する右方移動現象(右枝節点繰上げ)の総合的・包括的な調査に基づき抽出された諸特性の観点から、併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの検証

と精緻化を行う。

②等位構造が関与する右方移動現象(右枝節点繰上げ)の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムについて得られた知見が、等位構造以外が関与する右方移動現象(右方転移、重名詞句転移、結果節の外置、数量詞遊離)の併合と感覚運動体系における線形化の対応関係に対して、同じように適用できるのか、その分析の妥当性を検証する。

③併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの統語論・意味論的類似点及び相違点に基づき、先端的言語理論MPを構築するため、普遍文法(UG)[脳内の内在化された言語(I-language)]の解明及び構築とパラメータ設定の可能性を考察する。

④1)海外の最先端の研究動向を調査する、2)本研究課題に関する意見交換をする、3)アメリカ言語学会等の国際学会で研究成果を発表し、学術論文をまとめるために、海外出張を計画している。

・研究方法

【平成26-28年度】

(1)収集された基本的な資料(併合に関わる言語学書、線形化に関わる言語学書、併合と線形化に関わる言語学書、等位構造及び等位構造以外の右方移動に関わる言語学書、右方移動現象の分析に基づく併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの解明に関わる言語学書、国内外の言語学関連雑誌、博士論文等)から、併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムと右方移動現象 1)右枝節点繰上げ、2)重名詞句転移、3)右方転移、4)結果節の外置、5)数量詞遊離等の諸特性を見極め、包括的・網羅的に記述し、分析する。

(2)(1)に加えて、文献で従来扱われてこなかったデータも言語分析の資料とし、より包括的な言語現象の記述と分析に努めなければならない。より多くの言語事実を集め、広い範囲にわたり、より妥当な分析を提案するために、日本語に関しては、まず初めに、私の日本語に関する内省的言語直観により、例文の文法性についての判断を行い、次に、他の日本人にも判断をおおぎ、多くの例文を集める。英語に関しては、例文の判断を英語の母国語話者におおぎ、言語事実の収集に努める。

(3)(1)及び(2)の過程で収集されたデータに基づき、併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムを明らかにし、その統語論・意味論的特性を抽出する。

(4)(1)-(3)の過程を通じて抽出された統語論・意味論的特性を綿密に検討し、その背後に潜み、そのような特性を支配・統率している一般原理(統語操作の最大限の簡易化)を探る。

(5) (1)-(4)の併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムを通じて得られた成果が、普遍文法(UG)[脳内の内在化された言語]の解明及び構築に、どのように反映されるべきであるかを考察する。

(6)様々な言語の併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムを解明することを志向し、UGのパラメータを設定することに努める。

4. 研究成果

【平成26年度】

(1)本研究の目的：基本的統語操作である併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに関する総合的で包括的な調査と分析を行う。

(2)本研究の具体的内容及び意義・重要性：

①日本語のRNR構文に対して、Saito(1987)はRNR構文の共通要素(RNR要素)の右方移動に基づく分析、Sohn(1999)はかき混ぜによる頭在的移動が適用された記号列に音声形式部門での削除が適用されるとする移動と削除に基づく分析、Mukai(2003)は構成素性を考慮しない記号列削除に基づく分析、Kato(2003, 2006)は等位構造に特有な構文であることを捉えるためにAND Copyを提案し、素性[+ focus]を仮定する焦点化移動に基づく分析、Sato(2010)はWilliams(1997)の等位構造削除と従属部削除に基づく分析、Abe and Nakao(2010)は記号列空虚移動に基づく分析を提案している。日本語のRNR構文の分析には、RNR要素以外の要素である残余要素に左方移動が適用されるかどうかに関する違いがある。Sohn(1999), Kato(2003, 2006), Abe and Nakao(2012)は、左方移動を仮定しているが、Mukai(2003), Sato(2010)は仮定していない。本研究では、i)島の条件効果に関して、下接の条件効果が観察されない、ii)格標識や後置詞の脱落による文法性の低下は島の条件とは異なる要因による可能性がある、iii)左枝効果から属格名詞句が左方移動されることがないことに基づき、日本語のRNR構文は、残余要素に頭在的な焦点移動、すなわち、残余要素の左方移動が適用されて導かれる構文ではないことを明らかにした。なお、この研究は、日本中部言語学会第56回定例研究会(平成24年12月、静岡県立大学)での発表内容を大幅に改訂したものである。

②木村(2011, 2012)やBarros and Vicente(2011)で仮定されているRNR構文の多重支配分析に、新たな言語資料に基づき、検討を加えた。全域的RNR構文と対称的RNR構文の2種類のRNR構文を仮定する木村(2011, 2012)の枠組みで、RNR構文の対称性を捉えるための分析であるCitko(2011)の多重支配分析を批判的に検証し、等位項における対称性が破

綻している現象に基づき、全域的RNR構文の分析として、多重支配分析より削除分析の方が優れていることを指摘した。また、木村(2011, 2012)が対称的RNR構文として特徴づけたRNR構文のRNR要素が等位項内の本来の位置にあることを示し、全域的及び対称的RNR構文のRNR要素はともに等位項内の本来の位置にあり、削除分析に基づき説明されるべきであるとするRNR構文のin-situ削除分析を提案した。この研究成果から、木村(2011, 2012)で分析された3種類のRNR構文、[1]RNR要素が等位項内にあり、一致効果が示され、対称性が保証されているRNR構文、[2]RNR要素は等位項内にはあるが、一致効果の見られないRNR構文、[3]対称的述語や関係形容詞やa total ofの表現や分離先行詞を含む表現がRNR要素となるRNR構文に対して、RNR構文のRNR要素は等位項内の本来の位置にあり、削除分析に基づき説明されるとする排他主義的仮説に基づくRNR構文の削除分析が優れていることを明らかにした。なお、この研究は、日本言語学会第145回大会(平成24年11月、九州大学箱崎キャンパス)での発表内容を大幅に改訂したものであり、論文の投稿を招聘された研究である。

【平成27年度】

(1)本研究の目的：併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムの解明に資する構文の特性を抽出するために、等位構造及び等位構造以外で観察される右方移動現象に関する詳細な調査及び分析を行う。

(2)本研究の具体的内容及び意義・重要性：

①述語句削除(XPD)には、法助動詞は陳述緩和的(epistemic)意味と根源的(root)意味(cf. 荒木・小野・中野 1977)があるにもかかわらず、法助動詞のみが削除されずに残った時、その解釈が、何故、根源的意味が好まれるのかという問題がある。この問題に対して、2つの仮説(a)XPDの認可は命題内容である、(b)助動詞のbeと動詞のbeがあるを仮定し、動詞句削除(VPD)が適用されると従来分析された現象は、Williams(1984)に従い、述語句(動詞句・名詞句・形容詞句・前置詞句)が削除される現象であり、XPDの認可詞(cf. Zagona 1988, Lobeck 1995, Bošković 2014)は命題内容でなければならず、beには助動詞のbeと動詞のbeがある(Kaga 1985 cf. Williams 1984)と仮定することで、法助動詞の陳述的・根源的意味の決定に説明を与えることができることを指摘した。XPDと法助動詞mustの陳述緩和的・根源的意味の相関に関して、相や態を表わす助動詞が含まれている文は状態的な意味を表わし、その結果として、法助動詞の解釈が陳述緩和的意味となる。一方、状態の意味を表わす助動詞が含まれていない文は非状態的な意味を表わし、その文の法助動詞は根源的意味を表わす。この相関は、状態文と非状態

文の法助動詞の解釈と同様であり、状態の意味を表わす助動詞が生じている時に、文は状態的であり、法助動詞は陳述緩和の意味を、状態の意味を表わす助動詞が含まれない時、文は非状態的であり、法助動詞は根源の意味を表わすという一般化の枠の中で捉えることが出来る現象であることを明らかにした。なお、この研究は、英語語法文法学会第 23 回大会（平成 27 年 10 月、龍谷大学深草キャンパス）で発表した。

②英語には 2 種類の倒置文、すなわち、主語と助動詞が倒置する倒置文と文体的倒置文がある (Emonds 1976)。文体的倒置文の比較節置換・分詞前置・前置詞句置換等は、右方移動規則が適用されて導かれると分析された構文である。LaCara (2014) は、倒置された *as* 挿入節において、複数の助動詞が主語の前に生じることから、i) 主語と助動詞の倒置では導くことができない、ii) 通常の主語位置には存在しないと分析している。複数の助動詞が主語に先行する構文には、さらに、*than* 比較節・*nor* 倒置文・*as/so* 倒置文・*there* 存在文等がある。(Milsark 1974, Potts 2002, Toda 2007, Cuicover and Winkler 2008, Iwasaki 2010, Park 2012) 本研究では、3 つの仮説 (a) *be* は上昇動詞である (Stowell 1978, Heggie 1988)、(b) *be* は小節を補部にとる (Stowell 1978, Heggie 1988, Samko 2014)、(c) *be* には動詞の *be* と助動詞の *be* がある (Williams 1984, Kaga 1985) と倒置文の基底構造 [e] TENSE/ (Modal) (have) (been) [主部 (述部)] に基づく述語句分析を仮定することで、複数の助動詞を伴う倒置文の特性を適切に捉えることができることを指摘した。なお、このテーマを更に探究することで、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に寄与することが期待される。なお、この研究は、日本中部言語学会第 62 回定例研究会（平成 27 年 12 月、静岡県立大学）で発表した。

【平成 28 年度】

(1) 本研究の目的：等位構造及び等位構造以外で観察される右方移動現象の総合的で包括的な調査に基づき抽出された特性の観点から、併合と感覚運動体系における線形化のメカニズムに対する本研究の分析の検証と精緻化を行う。

(2) 本研究の具体的内容及び意義・重要性：
①動詞句削除 (VPD) において、*being* の削除が義務的で、*be* と *been* は随意的であることが指摘されている。(Sag 1976, Akmajian, Steele and Wasow 1979) Aelbrecht and Harwood (2015) は、機能範疇の補部に *vP* を仮定し、*ellipsis site* の *the progressive aspectual layer* にある *being* のみが削除されるとの規定に基づく VPD 分析を提案している。Bošković (2014) は、フェイズとフェイズ

主要部の補部のみに削除が適用されると仮定し、構造 [TP must [VPF₁ have [AspectP₁ be_i + en [VPF₂ t_i [AspectP₂ ing [VPF₃ be [VP …]]]]]]]] と *be* 移動を仮定し、動詞句領域を支配する、一番上位の AspectP がフェイズであるとの VPD 分析を提案している。このように、従来の分析では、*be* は動詞句内にあり、規則の適用により、動詞句外に移動するとの分析が提案されている。本研究では、*be* 移動のメカニズムを批判的に検証し、VPD に対して、2 種類の *be* (助動詞の *be* と動詞の *be*) に基づく分析を提案した。*Be* の語彙的特性に基づく分析では、*be* 移動を仮定する必要がなくなる。*being* の削除が義務的で、*be* と *been* の削除は随意的であるという現象は、Aelbrecht and Harwood (2015) のように、*ellipsis site* の *being* が削除されると規定することなく、*being* が動詞で、*be* と *been* が助動詞であることの帰結として、説明される。また、Bošković (2014) のように、一番上位の AspectP がフェイズになると規定することなく、フェイズである *vP* に基づく VPD 分析を提案することが可能であることを明らかにした。また、今後の研究で、助動詞構造に詳細な検討を加えることで、複数の助動詞が生じる右方移動構文の内部構造と派生メカニズムの解明に寄与することが期待される。なお、この研究は、日本言語学会第 152 回大会（平成 28 年 6 月、慶應義塾大学三田キャンパス）で発表した。

②述語句削除 (XPD) が適用された文に生じる法助動詞 *must* の意味に対して、(a) XP を削除する XPD、(b) XP の状態性と法助動詞 *must* の意味、(c) 2 種類の *be/have* の仮説 (a)-(c) に基づく分析を提案した。仮説 (a-c) に基づく分析の結果は、[a]-[b] であることを明らかにした。[a] … Modal [+Epistemic] AUX [+stative] [XP [-stative] Δ] or Modal [+Epistemic] [XP [+stative] Δ] [b] … Modal [+Root] [XP [-stative] Δ] (Modal は法助動詞、AUX は法助動詞以外の助動詞、XP は述語句、Δ は削除された要素を表わす。) [a] では、状態の意味を表わす AUX あるいは状態的動詞が生じている時、*must* は陳述緩和の意味を表わすことが示されている。XP として状態的動詞が生じて、陳述緩和の意味を表わすことがあるので、AUX は随意的な要素である。この場合、状態的動詞が XPD で削除され、陳述緩和的法助動詞 *must* のみが生じることになる。[a] の述部 (PP) は Modal [+Epistemic] AUX [+stative] [XP [-stative] Δ] あるいは Modal [+Epistemic] [XP [+stative] Δ] から成る状態文である。状態文なので、*must* は陳述緩和の意味を表わす。XPD により XP だけが削除され、記号列 Modal AUX あるいは Modal が導かれることになる。[b] は Modal [+Root] [XP [-stative] Δ] から成る非状態文である。非状態文なので、*must* は根源の意味を表わす。PP に AUX [+stative] が含まれることはなく、XPD により XP [-stative] が削除され、Modal が単独で生じる記号列が

導かれることになる。なお、この研究は、英語語法文法学会第 23 回大会（平成 27 年 10 月、龍谷大学深草キャンパス）での発表に基づく研究で、この研究内容は、日本中部言語学会の学会誌に掲載された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①木村宣美、述語句削除と法助動詞 must の陳述緩和的・根源的意味、*Ars Linguistica*（日本中部言語学会）、査読有、第 23 巻、2016、53-70 頁

②木村宣美、動詞句削除：2 種類の be に基づく分析、大会予稿集（日本言語学会）、査読有、第 152 号、2016、186-191 頁

③木村宣美、述語削除と法助動詞 must の意味、人文社会論叢人文科学篇（弘前大学人文学部）、査読無、第 35 号、2016、1-19 頁

④木村宣美、述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味、大会予稿集（英語語法文法学会）、査読有、第 23 号、2015、40-47 頁

⑤木村宣美、右枝節点繰上げと削除分析、言語研究の視座「坪本篤朗教授退職記念論文集」（開拓社）、査読有、2015、206-219 頁

⑥木村宣美、日本語の右枝節点繰上げと削除分析、人文社会論叢人文科学篇（弘前大学人文学部）、査読無、第 33 号、2015、1-13 頁

〔学会発表〕（計 4 件）

①木村宣美、連結詞 be の語彙的特性に基づく動詞句削除分析、日本中部言語学会第 63 回定例研究会、2016 年 12 月 10 日、静岡県立大学（静岡県静岡市）

②木村宣美、動詞句削除：2 種類の be に基づく分析、日本言語学会第 152 回大会、2016 年 6 月 25 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）

③木村宣美、2 種類の助動詞倒置、日本中部言語学会第 62 回定例研究会、2015 年 12 月 12 日、静岡県立大学（静岡県静岡市）

④木村宣美、述語削除と法助動詞の陳述緩和的・根源的意味、英語語法文法学会第 23 回大会、2015 年 10 月 24 日、龍谷大学深草学舎（京都府京都市）

〔その他〕

ホームページ等

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/jinbun/web/gakubu/general/bulletin.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 宣美 (KIMURA NORIMI)

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：90195371